

日本語教室におけるコミュニケーション

— 教師側から見た異文化接触の現状 —

原 澤 伊都夫

【要 旨】

現役日本語教師へのアンケートを基に、日本語教室における異文化接触の現状について教師の意識を調べるとともに教師が抱える“異文化”を背景とした問題点について考察する。アンケート調査から111の異文化トラブルの事例が報告され、それらは「教師が学習者の考えや態度に違和感を持つ」「教師・学習者双方で違和感を持つ」「学習者同士によるトラブル」「異文化とは関係のない事柄」などに分類される。これらの事例の考察を踏まえ、異文化トラブルを未然に防ぐための留意点として、異文化コミュニケーションの学習、教育担当者によるトラブルに関する情報交換、異文化コミュニケーションを視野に入れた教育プログラムの構築を提案している。

【キーワード】 異文化コミュニケーション 異文化理解能力 異文化トレーニング

1. はじめに

国内外の日本語学習者の増加に伴い、日本語教育の多様化が叫ばれ、様々な教育的アプローチが実践されてきている。その中の一つとして、異文化理解教育が挙げられるだろう。これは、教育内容に異文化コミュニケーション的視点を持ち込むことで、学習者がスムーズに日本語の背後に潜む日本文化という異文化に適応していくことをめざしている。このような学習者の視点に立った異文化理解教育は最近盛んになりつつある。しかし、それにも増して重要な要素として教師の側に求められる異文化理解能力がある。この点についても、平成12年に文化庁より発表された「日本語教育のための教員養成について」において、コミュニケーション重視の新シラバスが採用され、教師のコミュニケーション能力のより一層の向上が図られるようになった。

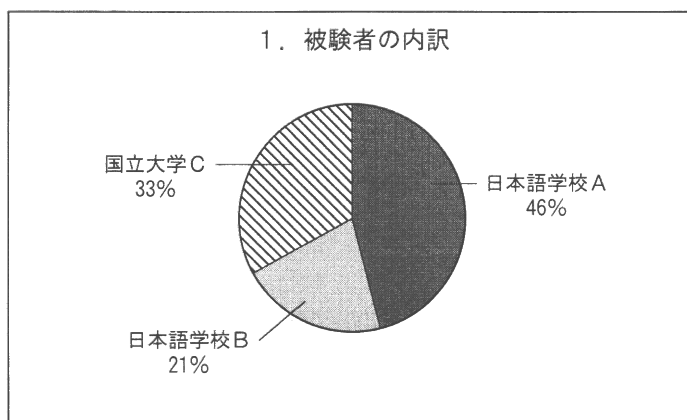
このように教師の側に異文化コミュニケーション能力が求められる背景には、日本語教室という異文化のせめぎあう最前線に日本語教師がいるという現実がある。特に日本国内で日本語を教える場合、通常教室の中には多種多様な文化が溢れ、それを日本語教師が日本語学習という共通目的のもと、コントロールしなければならない状況にある。そのためには、高度な異文化理解能力が問われることになるのであるが、そのような教師の側に立った異文化コミュニケーションの調査・研究はそれほど多くない⁽¹⁾。本稿では、現役の日本語教師にアンケートを実施し、日本語教室における異文化接触の現状について現場の教師の意識を調査するとともに、教師が抱える“異文化”を背景とした問題点に言及したいと思う。

2. アンケートの概要

今回のアンケートは平成13年10月に静岡市にある日本語教育機関に対して実施された。アンケートの目的は2つあり、1つは現役日本語教師の異文化理解に対する意識調査であり、もう1つは教師が抱える異文化問題の事例収集である。この項ではアンケート結果の概要を項目別に明らかにし、次項において教師の抱える異文化問題について詳細に検討することにする。

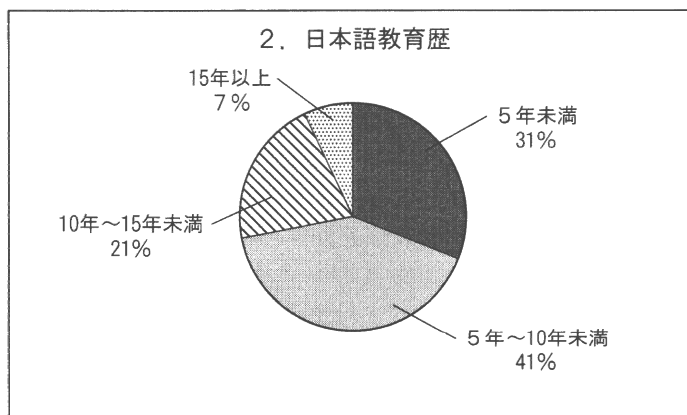
1) 被験者の内訳

今回のアンケートでは、静岡市内の日本語学校A（19名）、B（9名）と国立大学C（14名）で教える現役教師（合計42名）から回答を得た。回答者には専任のほかに、非常勤やパートの教員も含まれる。特に男女の別は問わなかったが、8割以上が女性の回答者であると推察される²⁾。



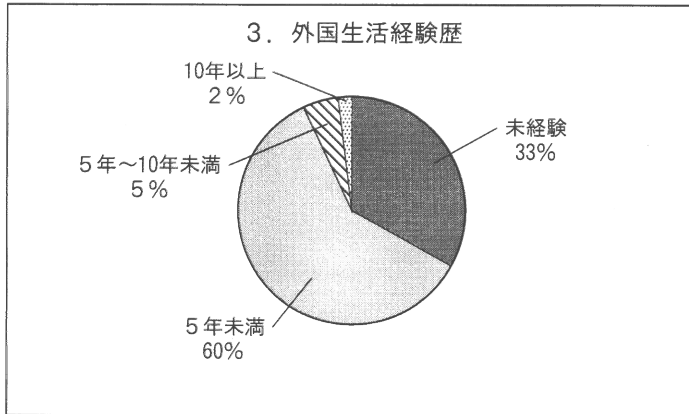
2) 日本語教育歴

今回のアンケートで回答を得た教師の日本語教育歴は平均すると約7年であり、いわゆる中堅層（5～10年未満）の占める割合が一番高く41%となっている。最長で27年であり、最短で3ヶ月となっている。



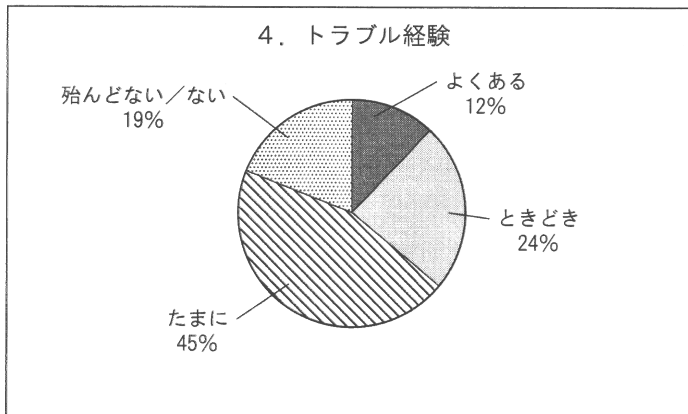
3) 外国生活経験歴

異文化理解にとって貴重な経験となる外国生活の有無をたずねたところ、約6割の教師が海外での生活を経験していた。これは、平均的な日本人と比べると非常に高く、海外での生活経験を通して日本語教師を目指すケースが多いことがうかがわれる。大多数が5年未満であるが、中には10年を超える教師もいた。



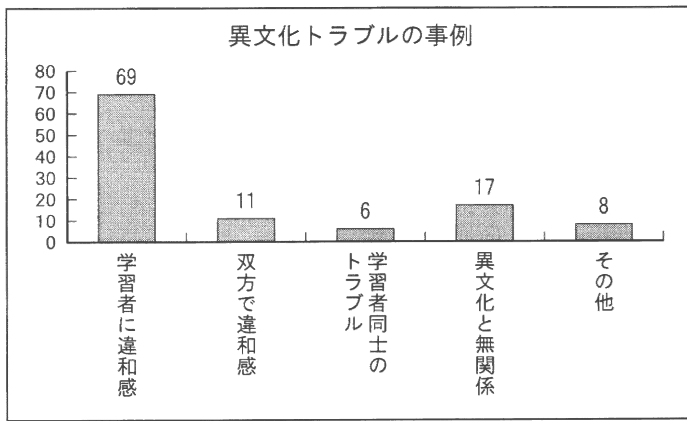
4) トラブル（違和感）経験

次に、日本語教室において「異文化」からくるトラブルや違和感を持った経験については8割以上の教師が「ある」と答えている。これは、日本語教室が異文化接触の現場となっていることから、必然的な結果ではある。ただ、その頻度について半数近い45%の教師が「たまにある」とだけ答えており、そのような経験があるものの、通常の授業においてはそれほど頻繁には感じていないことがわかる。



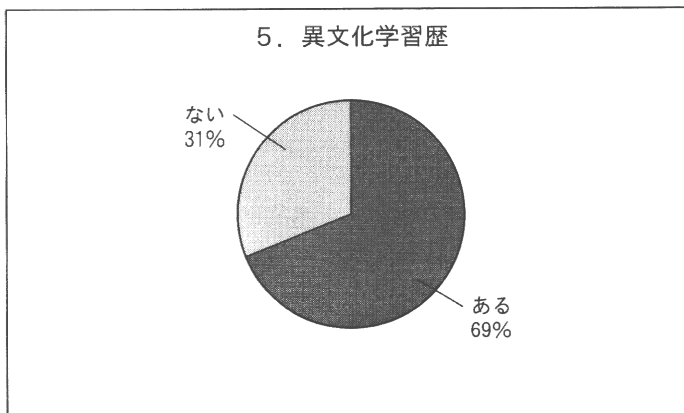
この教師が感じる異文化ストレスであるが、アンケートにその内容を付記してもらった。全部で111の事例が報告され、そのうち、「教師が学習者の考えや態度などに違和感を持ったケース」が69例あり、続いて「教師と学習者双方が違和感を持ったケース（トラブル）」も11例ほどあった。このように、アンケートに書かれた事例の約6割が教師側が一方的に

学習者からストレスを感じる場合であり、教師側の努力（忍耐または寛容）によってトラブルが未然に回避されていることがわかる。ただ、両者が違和感をもち、トラブルになった（またはなりかけたと思われる）事例も 11 例報告されていて、教師の忍耐を超える場合、トラブルへと発展することが予想される。注目される点として、学習者同士の衝突の事例が 6 例記載されていて、教師がしっかりとクラスをコントロールしないと、トラブルへとつながる危険性があることを示している。また、異文化と直接関係のない事例も 17 例報告されており、この点は教師の異文化に対する理解を深める必要があるだろう。これらの具体例については、次項で詳しく触れることにする。



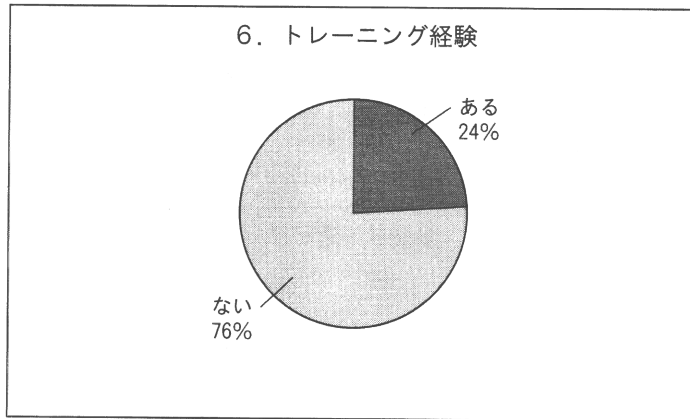
5) 異文化学習歴

異文化間コミュニケーションの学習について、独学を含めて今までの学習歴をたずねたところ、既習者が約 7 割、未習者が 3 割という結果であった。これは、異文化コミュニケーションの重要性が高まり、日本語教育能力検定試験の出題範囲にもなっていることから、日本語教師の基礎知識として学ぶ機会の多いことが関係していると思われる。また、日々異文化との触れ合いの中にいる日本語教師にとって、異文化に対する意識は高く、それがこの数字の高さにつながっているのであろう。



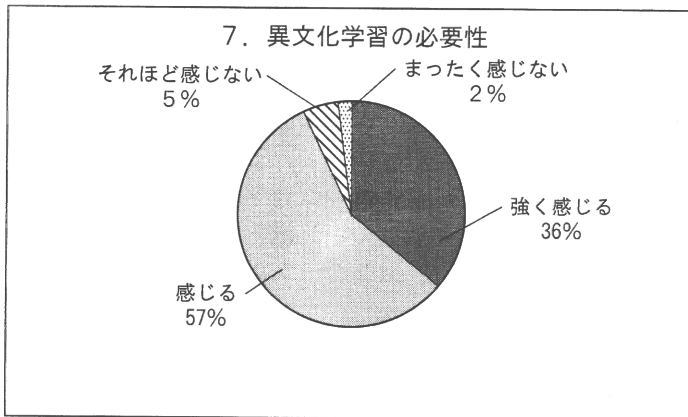
6) トレーニング経験

そのような異文化学習歴の高さにもかかわらず、シミュレーション・ゲーム、ロールプレイ、カルチャー・アシミレーターといった異文化トレーニングについては、経験者は24%にとどまり、未経験者が76%となっている。この数字の低さの理由として、地方においてはそのような学習機会を提供できるトレーナーが少ないことが挙げられる。上記トレーニングが行われるのは、大都市圏などに限られ、地方都市においてはそのような機会がほとんどないというのが実情である。今回のアンケートからわかるように、異文化接触の渦中にあると言ってもよい日本語教師にとって、異文化トレーニングの重要性はいうまでもないことであり、今後地方においてもそのようなトレーニングの実施が望まれる。



7) 異文化学習の必要性

最後に、異文化学習の必要性について尋ねたところ、93%の教師から必要性を認める（「強く感じる」または「感じる」）という回答を得た。このように、現役教師のほとんどが異文化学習の重要性を認識しているという結果となった。日本語教師のための日本語文法や教授法などの勉強会が盛んにおこなわれているが、教室内における異文化というものに視点を当てたセミナーやワークショップ開催の潜在的需要が高いことを示している。



3. 日本語教師が抱える異文化トラブル

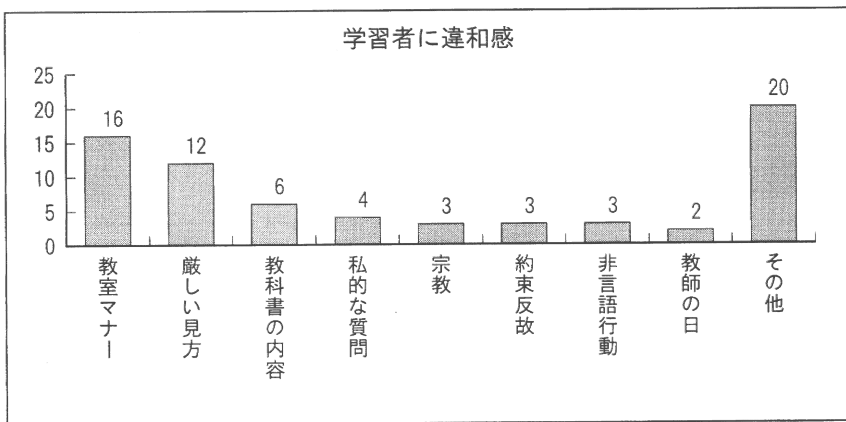
この項では、教室内において日本語教師が抱える異文化問題について、詳細に検討することにする³⁾。アンケート結果では111例の事例が報告されていて、その内容にしたがって、次の5つに分類される。

- 1) 教師が学習者の考えや態度に違和感を持つ
- 2) 教師、学習者双方で違和感を持つ (→トラブル)
- 3) 学習者同士のトラブル
- 4) 異文化とは関係のない事例
- 5) その他

以下、これらの分類にしたがって考察していくことにする。

1) 教師が学習者の考えや態度に違和感を持つ

教師が学習者から違和感を持ったという事例は69例報告されていて、全体の事例の60%以上を占めている。下の表は、その違和感の内容についてさらに詳しく分類したものである。



この中で同じ内容で一番多かったのが、教室内でのマナーの悪さである。テスト中でも平気で辞書を見る、カンニングをする、隣同士で助け合う、それを注意しても直らない。また、母語による会話、私語、物を投げあう、居眠りなど、学習態度の悪さを指摘する意見が多かった。これは、日本語学校の教師のアンケートに多く見られ、ある特定の国の学生によって占められるクラスでは、特にそのような傾向が強いようである。この背景については、学生の母国での学習環境の違いが関係していると思われるが、そのような学生の質を問題視する意見もある。つまり、純粋に日本に勉学のために来るというよりも、日本に来ればなんとかかなるだろう式の、学習意欲のそれほど高くない就学生が増えているという指摘である。最近の留学生数の増大は、以前にはあまり見られなかったこの種の学生の増加をもたらしている。特に財政基盤を持たないアジア系留学生にとって日本における生活は苦しく、働きながらの勉学を貫徹するためには、よほど確固たる目的意識がないと、挫折してしまう可能性が高い。そこには、酒田短期大学における事件を思い出すまでもなく、アジアからの多くの留学生が、勉学よりも労働を優先している現実が存在しているのであ

る。したがって、日本語教師にはこのような学生を統率できるだけの資質が求められることになる。この資質にはもちろん、異文化に対する深い造詣もさることながら、様々なバックグラウンドを持つ学習者との交流を深めるコミュニケーション能力が含まれる。これからの日本語教師には異文化理解能力にたけ、かつ多種多様な学習者とのコミュニケーション・スキルに優れた人材が求められていくと言えるだろう。

次に多かった違和感は、日本や日本人に対する厳しい見方である。これは、特に韓国、中国からの学生に多いという結果であった。クラスの授業の中で戦争の話題になったときに彼らが見せる非常に強い主張や態度に驚くことがある。最初は冷静に「過去は過去」と割り切って話していても、話が発展するにつれ、感情を抑えることができなくなる学生もいる。これらの国からの学生は日本との過去の歴史について非常に詳しく、生半可な知識で対応しようとする、墓穴を掘るだけである。日本語教師としてはできればそのような話題には触れないのが無難である。たとえこちら側が彼らの議論に対応できるだけの知識を十分に持っていて、議論に参加しても、彼らが感情的になるのは目に見えているし、感情的なしこりが残る可能性が高いからである。そのような議論に多くの時間を割く（この種の議論は時間がいくらあっても足りないぐらいである）よりも今彼らが必要としている日本語力を高める授業に専念するほうがより有益であろう。日本に来て間もない彼らもまた、そのような議論に参加できるだけの資格を有しているとは言えないかもしれない。異文化適応のUカーブで言えば、異文化に直面し、様々な問題を抱え、日本に対して否定的な態度を取るようになるのが、来日してから1年未満の学生に多いからである。したがって、もしそのような議論をするのであれば、来日後数年が経ち、日本や日本人に対しての知識や理解も深まり、精神的に安定している時期の方がより実りある議論へと発展するのではないだろうか。

教科書の内容は、教科書の記述に関して、学習者と日本人との理解に相違が認められる場合で、日本人の発想でクラスをリードしても議論がうまくかみ合わない場合である。今回のアンケートの事例で言えば、

- (1) 自分の故郷が開発され、筆者の寂しい気持ちを語った内容に対して、田舎を開発して発展させることは悪いことではないという意見が多く出された。
- (2) 臓器移植の話の中でエンゼルカードを見せたところ、「先生はいくらで売ると聞かれた。

などである。この種の理解の相違はしばしばあることで、教科書作成者の意図するような議論に発展しないこともある。日本語教師としては学習者の異なる文化背景により敏感になり、どのような状況にでも対応できる異文化能力を高めていく必要があるだろう。

私的な質問という事例は4例あり、給料、結婚、体重、年齢などの質問をされ、嫌な思いをしたというものである。これについては、必ずしも異文化かどうか疑問もあるが、ある中米の国では目上の人には年齢を聞いても失礼とはならないということで、ここでは、異文化的な要因による事例に含めておくことにする。宗教関係については、「イスラム圏からの学生は、宗教行事を学業より優先させる傾向にある」や反対に「ある国の学生にはまったく宗教という概念が欠けている」といったものである。また、約束反故の例では、国によって時間の概念が異なることから、日本的感覚でいうと時間が守れないと思われたり、

教師からの申し出には断れないのでとりあえず「はい」と返事をするが、結果的に約束を破ってしまうなどという事例である。非言語行動に関しては日本にはないジェスチャーなどの身振りや手振りであり、今回のアンケートではインド人が肯定や相づちのときに見せる「首を横に振る動作」や反対に「相づちをまったくしない」、「ポケットに手を入れたまま教師の話聞く」、「対人距離が近すぎる」などといった事例が報告されている。教師の日は、国によってそのような日が制定されていて、学習者からプレゼントをもらって、当惑したという例である。東南アジアの国では、日本以上に教師の社会的地位が高く、教師へのプレゼントにはそのような文化的背景が潜んでいるのである。

その他は、文化的な違いに端を発する個々の事例であるが、その中のいくつかを紹介しよう。

- (1) 仕事はつまらないと思っている日本人に対して、仕事は楽しくなくちゃと考える外国人研修生。
- (2) 卒業すると、～先生から～さんになり、友達扱いとなる。
- (3) ビデオなどを見ていて、日本人には深刻な場面で笑っていた。
- (4) 日本人よりプライベートな付き合いを求める。
- (5) ずいぶん面倒を見ておきながら、一言のお礼のことばがない。
- (6) 教室での習慣の違い。飲食、ガム、帽子など。

などである。これらの事例からもわかるように、教師が遭遇する異文化には多種多様なものがあり、それらの文化背景を事前に知っておくことは不可能に近い。しかし、どのような文化背景があるにせよ、異文化に対する正しい接し方を学んでおくことは、いかなる状況においても柔軟に対応できる力を養うことになる。ここに、日本語教師に対する異文化コミュニケーション教育の重要性があると言えるだろう。

2) 教師、学習者双方で違和感を持つ。(→トラブル)

事例が11例報告されているので、そのすべてをここにまとめて紹介する。

- (1) テストの不出来に対し、「勉強してこなかったのか」と聞いたところ、ひどく怒り出した。
- (2) 軽い冗談で言ったことが通じず、お互いに不快感を持った。
- (3) 非難したつもりではなかったのに、学習者にそのように取られ、辛い思いをした。
- (4) ジョークや些細なことを受け流してもらえず、お互いが不快になった。
- (5) 学習者が英語による授業を希望し、教師や学校側とのトラブルへと発展した。
- (6) 教室内での着帽を何度か注意したところ、帽子を投げ捨てて怒った。
- (7) 日本語コースに対する不満が蓄積し、コース終了後、英文による強い抗議文を送ってきた。
- (8) アジア系学習者に比べ、欧米系学習者の授業評価は厳しく、その批判的なコメントにショックを受けた。
- (9) 日本語学校から私立大学に合格した学習者が金に困り、必ず返すからと言うので、15万円貸したところ、結局返してくれなかった。
- (10) 元学習者から母国の食品や薬を買ったところ、定期的に送ってくるようになり、料金を請求されたので、手紙で断った。

(11) 学習者（男性）から突然結婚を申し込まれ、断るのに非常に苦労した。

これらの事例から日本語教師として留意しなければならないことがいくつか浮かんでくる。まず、(1)～(4)の事例であるが、日本的な感覚で言ったことが、その真意が伝わらずに誤解されてしまった例である。これには2つの理由が考えられ、1つは学習者の日本語力の弱さによるものであり、もう1つは文化的な違いによるものである。いずれにしても、教師が意図したようには正しく理解されないことがしばしばあり、いかに些細なジョークであっても、その発言には細心の注意が払われる必要があるであろう。もし、少しでも相手の受け取り方が変だと感じたら、話の内容を変えたり、発言の真意をもう一度伝えたり、学習者がどのように感じたのかを率直に尋ね、相手を傷つけるような発言であった場合、素直に謝る勇気も必要である。反対に(5)(6)(7)に関しては、日本での習慣やマナー、ルールなどについて事前に学習者によく理解してもらおう必要がある。(5)の事例に関しては英語が公用語として使われ、教育はすべて英語でおこなわれている国も多い。これらの国からの学習者の中には、英語で授業が行われるのは当然の権利であると考えてる者がいる。また、事例(6)における教室内での着帽もマナーとして特に問題とならない国も多い。したがって、本国では当たり前に行われていることが日本では必ずしもそうではないということを、事前に学習者に知ってもらおうことが重要である。コースが始まる前でのオリエンテーションでは、遅刻の扱い、授業態度、授業評価、教室内でのマナーなどをできるだけ細かく説明し、納得してもらっておくといいだろう。ある日本語学校で毎日居眠りばかりしている学習者を欠席扱いとしたところ、学習者が猛烈に怒り、他の学習者を巻き込んで、学校批判の大合唱となり、大きなトラブルになってしまったということを知ったことがある。この話からもわかるように、些細なことから大きなトラブルへと発展する可能性があり、このような文化的差異については教師、学校側はしっかりと把握しておくべきであろう。(8)の事例については、ポイントが2つある。1つは、アジア系に比べ、欧米系の学生ははっきりと自分の意見を表明するという点である。「こんなことを言ったら、きっと先生はよく思わないだろう」などという気を使うことは少ない。したがって、評価としては厳しいが、決して間違っていることを言っているわけではないので、教師として素直に受け止める度量が必要である。2つ目のポイントとしては、日本式と欧米式の授業形態の違いである。日本では講義形式や教師中心の授業が主で、ややもすると教師からだけの一方的な授業形式となってしまうことがある。また、日本語力の乏しさから学習者を子ども扱いするような側面が見られることもある。欧米系学習者というのは、どちらかという自主的な学習や双方向的な学習環境を求める傾向にあり、そのような点で日本的な授業形態に対しては授業評価が厳しくなる傾向にあると言えるだろう。

最後に、(9)と(10)に関してはやはり金銭的なやりとりは相手が外国人であれ、日本人であれかなり慎重になるべきである。特に留学生などでは連絡がつかなくなるのが予想され、貸す場合は返ってこないことを想定しておいたほうが無難であろう。また、(11)に見られるトラブルは、文化的背景というよりも、かなり個人的要素が強いように思われる。思い込みの激しい人間というのはどこにでもいるからである。ただ、日本語教師という職業柄、独身学習者を多数相手にすることが多いことから、時には学習者からの思いを打ち明けられることも予想され、そのような場合は公私の区別をきちんと取る必要があるだろう。事

例に見られるような一方的な思い込みの場合は、毅然たる態度で明確に断る必要があり、相手の気持ちをおもんばかっての日本式の断り方は事態をいっそう混乱させるだけである。

3) 学習者同士のトラブル

今回の調査であまり予期していなかったことに、この学習者同士によるトラブルの事例があり、以下の6例が報告されている。

- (1) あるアジアの学習者が「日本では果物が道から手の届くところになっているが、自分の国ではすぐに誰かがとってしまう。」と発言したところ、母国の恥をさらしたということで、同じ国の他の学習者から強い非難を浴びた。
- (2) あるアジアの国の学習者は決まりきった答えしか言わず、違った意見や間違った答えを言った者に対しての批判が激しい。
- (3) 夫が日本人という学習者が普通体で先生と話すのを、上下関係を重んじる他の国の学習者がよく思わず、水面下で不和が見られた。
- (4) 学習者同士のケンカがあり、教師がいないところで、暴力行為があった。
- (5) アジアを中心とした国の学習者は、文化の違いをあまり理解していず、国対国の誤解からいさかいが生じることがある。
- (6) 自分の国の習慣を押し通そうとして、他の国の学生や教師とトラブルを起こす者がある。

アジア系の学習者の中には、母国をバカにされたくないという意識が強いあまり、母国の批判となるような事柄に非常に敏感なものがある。ましてやそれが母国の学習者によるものである場合は、その批判の矛先がその人間に注がれるのは容易に想像がつく。また、戦争に関する事実関係にしても、事が重大であるだけに、あやふやな発言をする者には強い非難が集中するようである。日本式に「まあその辺はそれぐらいで」とならないことが多いので、教師には注意が必要である。前項でも述べたように戦争に関する話題についてはあまり触れないようにして、(1)の事例であれば、「日本でも盗む人はいる。収穫前の果物がごっそりと盗まれる事件が多発している。」などと、母国の恥とはならないようにもっていくことも混乱を回避する1つの方法であろう。やはり、教師としてはそれぞれの国のよい点についてできるだけ触れるようにして、学習者同士での不和が起こらないように注意すべきである。(3)については、クラスの中ではできるだけ丁寧な言い方を学習者に求めるべきであり、普通体での会話は私的な場面に限るのが教師としてのマナーであろう。(4)(5)(6)の事例はまさに学習者に対する異文化教育の必要性を痛感する。授業に異文化的な活動を取り入れるなどして、学習者にも多文化に対する気づきを促すことが必要だ。国によって習慣や考え方が違うことを理解させ、お互いの文化を尊重しあうクラス環境を作り上げたいものである。

4) 異文化とは関係のない事例

外国人との摩擦を考える時、我々は3つの側面から考える必要がある。それは、文化的側面、普遍的側面、個人的側面である。文化的側面とは異文化を背景とするものであり、ある文化に所属する人間に共通して見られる特徴である。普遍的側面とは、人間として誰でも共通して持っている特徴で、文化的な違いは見られない。たとえば言えば、肉親の死に涙を流す、うれしい時には笑いがこぼれるといった、人間としての共通の資質をさす。

個人的側面とは、ある行動がその個人の資質によっている場合である。エレベーターを使わないで、階段を歩くとといった行動がこれにあたる。したがって、外国人とのトラブルを何でもかんでも異文化に帰すということは慎まなければならない。今回のアンケートでも、あまり異文化とは関係のないと思われる事例が報告されているので、ここに紹介することにする。

- (1) 金銭的に苦しい生活をしているのに、遊びにお金をたくさん費やしている。
- (2) 漢字を獲得するには自主学習が必須であるが、授業の中でそのような意欲が見られない。
- (3) なんでも日本人の類型にあてはめようとする。

(4) 検定や入試が近づくと、その対策の科目だけを求め、文化的な科目には目もくれない。初めの2例はどちらかという、個人的な側面によるものだと思われる。最低限の生活で頑張っている学生も多いし、漢字学習に意欲的な学習者も少なくない。このような態度はどの国の人間にも見られることで、文化とは直接関連付けないほうがいだろう。また、(3)の事例は典型的なステレオタイプであり、私たち人間であれば、本質的に陥りやすい特徴である。(4)についても、彼らの大きな目的が大学入試であることから、それを突破するための勉強を求めるのは自然な態度である。私自身の経験でも、高校3年の時には、受験科目以外の科目には正直言って身が入らなかったのを覚えている。したがって、(3)と(4)の事例は普遍的な側面から捉えた特徴であるといえる。事例によっては、3つの側面が複雑に絡み合っていることもあるが、トラブルの原因を異文化だけに求めるのは慎まなければならないだろう。

5) その他

その他の回答には、異文化問題についての感想が記述されていて、教師の意識を知るための参考となるので、ここにいくつか紹介しておくことにする。

- (1) どのようにしたら学生同士が理解しあえるか、教師が戸惑うことがある。
- (2) ある外国籍児童が文化の違いによって、日本社会に溶け込めないことがあった。
- (3) 教室内のトラブルをすべて異文化の問題として捉えるのには問題がある。
- (4) 日本語教師として、学習者からの率直な意見を聞かせてもらっている。

現場にいる日本語教師の率直な感想が述べられていて、(1)と(2)の記述には教師が直面する異文化問題についての戸惑いが表されている。(3)のコメントはまさにその通りである。また、(4)からは「郷にいれば郷に従え」式の考えでなく、外国人の考えを素直に理解しようとしている姿勢を見ることができる。

4. おわりに

本稿では、日本語教室において毎日繰り広げられている異文化接触の実際について、教師の側からという視点で考察をおこなった。このような異文化交流の現場を教える側から眺めてみると、かなりのストレスを抱えながら頑張っている日本語教師の姿が浮かんでくる。また、アンケートの調査からもわかるように、異文化による問題をどのように対処したらよいか悩んでいる教師も多い。最後にアンケート結果の分析から、日本語教室で起こる異文化問題の解決に向け、次の3つの留意事項を挙げたい。

1) トレーニングを含む異文化間コミュニケーションの学習

文化の異なる人間との接触の機会が多い日本語教師にとって、異文化コミュニケーションの基礎知識は必要不可欠となってきた。例えば、異文化適応の知識を持つことで、学習者の置かれた状態に配慮した教育・指導を効果的に行うことができるようになるし、教師自身の異文化に対する理解を深めることで、学習者との無用なトラブルを回避することも可能となる。このように、多様な背景を持つ学習者をクラスの中でまとめていくには高度な異文化コミュニケーション能力が求められることになるのである。そのためには、異文化トレーニングが効果的な学習方法のひとつであろう。書物からの知識だけでは具体性がなく、現実感に乏しい。トレーニングに参加することで、それまでに学習した基礎知識が具体化する。ただ、ここで問題となるのは東京、大阪などの大都市圏を除く地方においては、異文化トレーニングの機会が非常に少ないということがある。とは言え、まったく行なわれていないわけではないので、そのような機会を見つけ、積極的に知識を深めていくべきであろう。

2) 教育担当者によるトラブルに関する情報共有

異文化によるトラブルは1人で抱え込むことが多い。しかし、このような悩みは皆で共有することにより、解決策が見えてくるものである。特に同じようなトラブルが他の教師のクラスでも起こっている可能性もある。クラスを担当する教師がお互いの悩みを相談できるような信頼関係が必要である。教員が多数いる機関では、コース別のグループに分かれてそのような問題を話し合う機会を持つことが重要である。コース終了後に教育内容や教材についての反省会を持つことが多いが、そのような機会に異文化的な問題提起をし、皆で話し合う機会を持ちたいものである。

3) 異文化コミュニケーションを視野に入れた教育プログラムの構築

様々な日本語コースを計画する時に、文法、読解、聴解、作文、会話といった科目に、異文化的な視点を持ち込んだ活動を取り入れるべきである。最近の日本語教材の中には異文化的な視点を取り入れたものもあるので、それを活用するとよい。また、時間に余裕があれば、「日本文化」、「日本事情」といった教科の中で、扱うこともできる。特別に「異文化コミュニケーション」と名うった科目を立てなくても、日本語教育の中で、異文化問題を扱うことは可能である。また、異文化トレーニングを行う場合は、学習者だけでなく、日本人も入れると効果的である。留学生や就学生だけでなく、受け入れ側の日本人が入って話し合うことで、お互いの意識のずれに気がつき、かつ、学習者同士の理解も深まる効果がある。いずれにせよ、このような異文化プログラムの導入に当たっては、教師自身に対して高度な異文化コミュニケーション能力が求められるわけで、その意味で現役日本語教師を啓蒙するセミナーやワークショップなどに参加し、積極的に異文化問題について取り組んでいく必要があるであろう。

注

- (1) 異文化コミュニケーションの観点から日本語教師に触れているものとして、松田(1990)、加賀美(1997)、徳山(1998)などがある。
- (2) アンケートにおいては、男女の別および専任、非常勤の別は特に問わなかった。目的が日本語教室における異文化理解であることから、この種の別はそれほど必要ないと判断したためだが、男女差や専任・非専任による意識の違いや性差に関係するトラブルなどを考える時、その点についても調査の対象とすべきであったかもしれない。
- (3) 本稿で引用するアンケートの実例は、実際の記述に則しながらも、筆者によって分りやすくまとめられたものであることを予め断っておく。

参考文献

1. 阿部洋子(1996)「日本語教師と異文化理解」『日本語教師養成シリーズ 日本と社会』佐治圭三、真田信治(監修)東京法令出版
2. 岩田祐子(1992)「英語教育におけるコミュニケーション摩擦 —大学の英語教育と異文化トレーニングの方法—」『異文化間教育6』アカデミア出版
3. 岡崎ラブ和子(1992)「オーストラリア人留学生の日本文化への適応」『異文化間教育6号』アカデミア出版
4. 加賀美常美代(1997)「日本語教育場面における異文化間コンフリクトの原因帰属—日本語教師とアジア系留学生との認知差」『異文化間教育11号』アカデミア出版
5. 倉地暁美(1996)「異文化間教育学と日本語・日本事情の接点を求めて」『異文化間教育10号』アカデミア出版
6. 徳山道子(1998)「日本人教師の異文化適応と社会・文化的要因 —青年海外協力隊派遣の日本語教師の調査から」『異文化間教育12号』アカデミア出版
7. 細川英雄編(2002)「ことばと文化を結ぶ日本語教育」凡人社
8. 本名信行(1990)「日本語と日本文化 非言語伝達行動を中心として」『異文化間教育4号』アカデミア出版
9. 松田陽子(1990)「海外における日本語教育 異文化間コミュニケーション能力の観点から」『異文化間教育4号』アカデミア出版

Communication in a Japanese Classroom
— Cross-cultural issues from teacher's perspective —

HARASAWA, Itsuo

Based on questionnaires collected from Japanese language teachers on active service, the paper discusses cross-cultural issues in a Japanese classroom along with teacher's perspective on these problems. The questionnaire survey shows 111 examples of intercultural troubles occurring in everyday' teaching activities which are roughly categorized into 4 groups; teachers feeling strange from learner's idea and attitudes, teachers and learners feeling stressed with each other, conflicts among learners, and matters irrelevant to culture. On the analysis of these issues, the paper insists that teachers share their problems with the other teachers having basic cross-cultural communication knowledge and proposes that a Japanese language program be thoroughly organized in terms of inter-cultural communication as well as on pedagogical principles.